

フレデリック・ダグラスとジョサイア・ヘンソン ——十九世紀中葉の「反抗的な奴隷」像に関する一考察——¹

堀 智 弘

はじめに

十九世紀米国の「聖書に次ぐ」²大ベストセラーとなった反奴隷制小説『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*)が一冊の本として世に出て一年後の1853年、作者ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe)は、この小説が南部奴隷制の現実を歪曲しているという批判に応じて『アンクル・トムの小屋への鍵』(*A Key to Uncle Tom's Cabin*)を出版する。同時代の多くの逃亡奴隷体験談の抜粋集ともいえる『鍵』において、ストウが小説のタイトルともなった従順な奴隷アンクル・トムのモデルのひとりとして挙げているのがジョサイア・ヘンソン(Josiah Henson, 1789-1883)である(26-27)。ヘンソンは1849年に自身の逃亡奴隷としての経験を書いた『ジョサイア・ヘンソンの生涯』(*The Life of Josiah Henson*)を出版していた。彼がアンクル・トムのモデルとして一躍有名になると、彼の逃亡奴隷物語は大幅に加筆され、『フィクションよりも奇妙な真実—ヘンソン神父が語る自身の生涯』(1858年)という新たな題名とストウの序文を付けられて、この高名な元奴隷のこともっと知りたいと望む読者たちに向けて送り出されることになった。³

しかしながら、『アンクル・トムの小屋』で広まった白髪の好々爺という先入観をもって第一作『ヘンソンの生涯』を読んでみると、⁴そこで描かれている人物にどこか違和感を抱かずにはいられない。⁵それは単に、『ヘンソンの生涯』の奴隷制と格闘する主人公が青年期から四十代初めにかけての若々しい人物だからというだけではない。若きヘンソンが、アンクル・トムがみせるような主人に対する完全な服従という期待を裏切って、自暴自棄なまでの攻撃性を垣間見せることがあるからである。この抑圧しきれない攻撃性において、ヘンソンは、ストウが模範的な奴隷として祭り上げるには口を濁すほかなかったフレデリック・ダグラス(Frederick Douglass, 1818-95)に近似する。ストウがアンクル・トムのモデルとしてダグラスよりもヘンソンのことを前面に押し出したがるのは、後で論じるように、この二人の元奴隷のキリスト教への態度の違いによるところが最も大きいと考えられるが、⁶この選別によって覆い隠されるのは反抗的な奴隷としてのヘンソンの横顔である。そこで本稿では、ヘンソンの逃亡奴隷物語のなかでも最大のクライマックスとなっている主人殺害計画を経て逃亡を決断するまでの過程に特に焦点を合わせ、ダグラスの1845年の逃亡奴隷物語のなかの類似する記述と比較することを通して、『アンクル・トム』以後の奴隷表象では見えにくくなってしまったヘンソンやその他の奴隷の経験の不可欠な一側面を浮き彫りにしてみた

い。そうすることで十九世紀半ばのアメリカを南北戦争へと突入させることになる社会的葛藤の多面的な内実を知るてがかりとなるであろう。

『ジョサイア・ヘンソンの生涯』は、奴隷制廃止運動の盛り上がりと歩調を合わせた逃亡奴隷物語 (slave narrative) 出版ブームのさなか、⁷ ダグラスの第一自伝『フレデリック・ダグラスの生涯の物語』 (*Narrative of the Life of Frederick Douglass*) から四年おくれて出版された。同年代に出版された二作品であるが、ヘンソンの体験談がダグラスのそれと違う最大の点は、前者は宗教的な改宗物語としての性質を色濃くもっているのに対して、後者はむしろ南部奴隷制といういわば「神なき世界」の剥き出しの暴力をどのように生き抜いたかを主題としている点である。奴隷が自由を獲得する過程において、宗教的な意識の目覚めと読み書き能力の獲得は大きな意味をもつが、ヘンソンとダグラスではこの二つの契機への比重の置き方が異なっている。ダグラスがその第一自伝で力説してやまないのは、自身の宗教経験よりもむしろ、南部における奴隷制度とキリスト教会との共謀関係である。ダグラスは『生涯の物語』の第九章で、三人目の主人トマス・オールドがメソジスト派の教会に通い始めたことで起こった変化について述べている。オールドは、生まれが貧しく、もともとは船以外の財産をもっていなかったが、妻が相続した遺産によって奴隷を所有するようになった。奴隷たちから「ご主人様」ではなく「オールド船長」と呼ばれていたように、ダグラスの記述によれば、オールドは横暴であるが、主人にふさわしい資質が欠ける人物だとみなされていたようである (51)。そんなオールドが分不相応な奴隷所有者としての役割を果たす上でイデオロギー的な支えとなったのが、南部キリスト教である。当時十五歳のダグラスは、⁸ 横暴な主人が宗教を得ることで少しは優しくなるのではという淡い期待を抱いていた。しかしこの期待は完全に裏切られる。宗教はむしろ主人の残忍さを助長することになったのだ。

もしそれが彼の性格に対してなんらかの効果を与えたのだとしたら、それは彼をあらゆる面でもより残忍で忌まわしいものにした。というのも、改宗以前よりも以後の方が、彼はずっと悪い人間であったと私は思うからである。改宗の前には、彼がその粗暴な野蛮さのなかで自分を守り保つために頼りとなっていたのは、自分自身の墮落であった。しかし改宗の後には、彼は宗教のなかにその奴隷所有者としての残忍さを肯定し支えてくれるものを見つけたのだ。(52)

これ以後、トマス・オールドは熱心なキリスト教徒と酷薄な奴隷主人の両方として仕事に励むことになる。

こうしたキリスト教信仰と奴隷所有の労働倫理との奇妙な結合は、⁹ 続く第十章で登場するエドワード・コヴィにおいて不気味なまでの体現をみる。反抗的な態度をやめようとしないうダグラスに手を焼いたトマス・オールドは、同じ地域のメソジスト派教会のなかで有能な「奴隷調教師」として知られていたコヴィのもとにダグラスを送り込む。教会員としてのコヴィの熱心さは周知のことであり、「時として彼以上に信心深くみえる人はほとんどいなかった」ほどであった (57)。同時に、彼はダグラスたち奴隷を朝から晩まで「忍耐の限界まで」働かせ、常に監視の目を怠らなかつ

た (56)。「自分は最高の神の偽りない崇拜者であるという荘厳な確信」を抱くコヴィの揺るがざる自己欺瞞は、ダグラスにとっては、「全能の神を欺くことができる」という甚だしい思い上がりりとほとんど異なるところがないものとうつる (57)。奴隷所有の論理を宗教的信仰心と同等の厳格な労働倫理にまで高めることに成功したコヴィは、ダグラスにとって最強の敵としてあらわれる。六ヶ月にわたってコヴィから迫害を受けた結果、ダグラスは「身も魂も心も」完全に飼いならされてしまう (58)。このどん底の状態からダグラスがいかにして立ち上がってコヴィに反撃し、「奴隷制という墓から自由という天国への栄えある復活」(65)を果たすのかはよく知られるところであるが、南部キリスト教と奴隷制との共犯関係についてダグラスはこのように結論づけている。「南部の宗教は最も恐ろしい犯罪を覆い隠すものでしかない(…)、奴隷所有者の最も暗く、最もあさましく、最も甚だしく、最も極悪非道な行いが最も強力な庇護を見つける暗い避難所である。(…)私がこれまで会ったすべての奴隷所有者のなかで、信仰心厚い奴隷所有者こそが最悪である。すべての奴隷所有者のなかで彼らは最も卑劣で下等で、最も残忍で臆病であった」(68)。社会的弱者である黒人奴隷がキリスト教への容赦ない批判をここまで公然と行うことは異例であり、社会的孤立の大きな危険性を伴うものであった。そのため、ダグラスは『生涯の物語』の末尾に、南部キリスト教とキリスト教一般はまったくの別物であるという自身の立場を明確にする追記をわざわざ入れて攻撃の矛先を弱めている (97-102)。しかし、ダグラスの自由獲得の物語において宗教の果たす役割は見過ごすことができないことは確かだとしても、それはもう一つの重要な契機、つまり読み書き能力の習得に比較するとあくまで両義的な地位にとどまっている。

宗教的意識の覚醒という出来事を枠づけるかのように、¹⁰ダグラスが自身の自由獲得への道すじにおける最大の道標として提示しているのが、読み書き能力の獲得である。八歳から十五歳までの七年間にわたるボルチモア時代に主人の妻ソフィアにアルファベットを教えてもらったのに始まり、家から持ち出したパンと交換に貧しい白人の少年たちから「知識というより貴重なパン」(41)をもらう、あるいは模範的演説集『アメリカの演説家』(*The Columbian Orator*)を自分で購入するなど、地道な練習を根気強く積んでいった結果、逃亡のための通行許可証を自分で偽造できただけでなく、自身の『生涯の物語』を自分の手で書けるようにまでなる。こうした一連のエピソードが示唆するのは、ヘンリー・ルイス・ゲイツが指摘するように、ダグラスにとって(そして他の多くの奴隷にとって)「力は読み書き能力のなかにあった」ということである (Gates 108)。

自分の物語を自分の手で綴ることのできたダグラスとは対照的に、ヘンソンは文字を書くことができず、白人の協力者に口述筆記してもらわなくてはならなかった。¹¹ダグラスにおいては読み書き学習の開始と宗教意識の目覚めは幼年期から思春期にかけてのほぼ同時期に起きて、しかも力点は前者に置かれているのに対し、ヘンソンの場合は読み書きを学び始めるのは1830年にカナダに逃亡して以降のことである。この時すでに齢四十を超えていたヘンソンは、幼い自分の息子に読み書きを教わるといふ実に涙ぐましく印象深いエピソードを語っている (Henson, *Life* 62-66)。

読み書き訓練とは対照的に、ヘンソンが宗教体験をするのはダグラスの場合とさほど変らない青

年期であった。ヘンソンは 1789 年に十九年後のダグラスと同じくメアリーランド州に奴隷の両親のあいだに生まれた。ダグラスが幼年期を過ごしたタルボット郡は南北に長いチェサピーク湾の東岸に位置するのに対し、ヘンソンが生まれたチャールズ郡、そして彼が後に移ったモンゴメリー郡はいずれもチェサピーク湾の西側、ポトマック川沿いのワシントン D.C. 近郊にある。ヘンソンは若い頃から屈強な体格に恵まれ、十五歳にして「農場でなされるすべての仕事に長け、わたしのまわりにいる誰よりも早く遠く走れ、長いあいだ取っ組み合いができ、高く跳べた」と記している (7)。ヘンソンがたくましい青年へと成長しつつあった十八歳の時に、彼が働く農園から数マイルの距離にあるジョージタウンでキリスト教の説教をはじめて聞いたことが大きな転機となる。説教をしていたのは同地に住むジョン・マッケニーという名のパン職人で、彼は敬虔なキリスト教徒としてのみならず、奴隷制に断固として反対する人物としてもよく知られていた。¹²ヘンソンが特に感銘を受けたのは、説教師が「ヘブライ人への手紙二章九節」から「神の恵みによって、[イエスは]すべての人のために死んでくださったのです」という一節を引いて、救済は選ばれた少数だけでなく、自由人にも奴隷にも平等に訪れると説いたことであった。そんな説教師の話の聞いていると、「私の心臓は私のなかで燃えさかる」までになった。そしてキリストのような立派な人物が「私のために死ななければならなかったということ——他の人々のなかでもこの私、貧しく軽蔑され虐待されている奴隷、仲間の人間たちによって報われない労働と無知以外の何にもふさわしくない、精神と身体の退廃にしかふさわしくないと考えられている奴隷のために死ななければならなかったということ——を考えると私はこれ以上ない興奮を感じた」(12)。説教からの帰り道においてもヘンソンの興奮は覚めやらず、彼は「道から外れて森のなかに入り、光と助けを求めて神に祈った」ほどであった。ヘンソンは、自身の改宗と「新たな生への覚醒」、つまり「私がそれまで考えたことのあるどんなものよりも貴い力と運命についての意識」がこの日に始まったとしている (13)。

十八歳のヘンソンの「新たな生への覚醒」は、それが物語のなかでもつ中心性において、十六歳のダグラスの「奴隷制という墓から自由という天国への栄えある復活」を思い起こさせる。ただ大きく違うのは、ヘンソンの覚醒は純粋に個人の宗教的意識の領域に限定されていて、現実に存在する奴隷制については言うべきところがない（したがって奴隷制を容認する余地を残す）のに対し、ダグラスが奴隷調教師とじかに拳を交えた結果に達成した「復活」は、奴隷制に力で抵抗することを正当化、もしくは称揚さえする含みをもっていることである。この違いは、彼らの語る物語が「あの世」での神との関係に力点を置いているのか、それとも「この世」での自由の達成を焦点とするのかという点に大きく関わってくる。ストウ婦人がダグラスよりもヘンソンをモデルとして好んだのも、奴隷制度廃止のメッセージを奴隷の暴力というあまりに差し迫った危険性から遠ざけて、神への信仰に基礎づけるためであったらう。

ヘンソンとダグラスを比較する上でもうひとつ注目に値するのは、ヘンソン自身もダグラスと同様の白人の奴隷監督との暴力的な衝突を経験しているが、そのきっかけもその帰結もダグラスの場合とは大きく異なっているという点である。ヘンソンが十九か二十歳の頃にその出来事は起こる。

当時、休日になると、周辺の奴隷所有者たちは酒場集って酒とギャンブルに一日中ふけることが常であった。そうした際に、酔いつぶれた主人を家に連れ帰り、けんかが起きた場合には主人を助け出す付き添い役にヘンソンは任命されていた。その日も、主人が近隣の農園のブライス・リットンという名の奴隷監督と口論になり、ヘンソンが制止に入ったのだが、力のはずみでリットンを床にはねとばしてしまう。このことを根に持ったリットンは、一週間ほどたったある日、三人の奴隷を連れて、一人でいたヘンソンを襲撃する。ヘンソンは数で勝る襲撃者の攻撃をしばらくはしのいでいたが、最後は倒れてリットンから杭でめった打ちにされてしまう。彼はなんとか命を取り留めたものの、この襲撃で右腕と左右両肩甲骨の骨折を含む瀕死の重傷を負い、仕事に復帰するまで五ヶ月の休養を必要とした (*Life* 13-18; *Autobiography* 27-30)。この場面は、ヘンソンの改宗物語のなかでも際立った描写の鮮明さと血なまぐささで、ダグラスのコヴィとの戦いを想起させる。ただし、ダグラスの戦いで血を流すのはもっぱら対戦相手であるのに対し（「私の指先で彼に触れた箇所では血を流させた（中略）彼が私から流血させることはなく、私が彼から流血させたのだ」）、ヘンソンの場合は血を流すのは逆に彼自身だけである（「それ [ヘンソンに対する殴打] はたくさん流血させた（中略）私の口からたっぷりと血をほとばしらせた」） (*Douglass, Narrative* 64-65; *Henson, Life* 17)。さらに、ダグラスの戦いは彼自身の自由獲得の願望に起因していて、実際に自由達成のための不可欠な一段階となっているのに対し、ヘンソンが戦いに巻き込まれたのはそもそも身勝手な主人を守るためであり、それが彼にもたらしたのも「この日から現在まで両手を自分の頭まで上げることができなくなってしまった」という奴隷制の負の刻印であった (*Henson, Life* 18)。

改宗物語として書かれた『ヘンソンの生涯』は、ダグラスの物語といくつものモチーフを共有しながらも、それらの要素を異なった枠組みのなかに置いている。上で言及したような、若い奴隷の閉ざされた闇からより高い意識への覚醒や、奴隷制の暴力を体現する人物との格闘はいずれもそうした共通の要素として数えることができる。ダグラスと比類する顕著な要素としてもう一つ挙げられるのが、ヘンソンが決定的な決意へと至るまでの一連の場面である。ダグラスの場合は彼を服従させようとする者に対して「戦うことを決心した」というのが、彼が自由を獲得するための長い苦闘の道のりのなかで、大きな転機となっていた (*Douglass, Narrative* 64)。これに対して、ヘンソンにおいて最も決定的な「荘厳な決意」が訪れるのは、忠実な自分を深南部に売り払おうとする不条理な主人を殺さなくてはという自身の衝動を克服して、「自分自身を神のご意志にゆだね」た瞬間である (*Henson, Life* 43)。以下ではこの決意までの経緯をみてみたい。

リットンに襲撃されて生涯癒えない傷を負ったヘンソンであったが、それ以外の面では奴隷としてはまれにみる充実した生活を送っていた。彼は仲間からのみならず主人からも信頼され、若くして農場の監督役に抜擢される。二十二歳の時には近隣の農場に属するシャーロットという名の奴隷と「結婚」¹³し、十二人の子宝にも恵まれ、うち八人が大人になるのを見届ける。奴隷としては波風の少ない生活を送っていたヘンソンに大きな転機が訪れたのは1825年、彼が三十代半ばの時である。主人アイザック・ライリーが義理の兄弟との訴訟に負けてしまい、奴隷を含む彼の財産が没

取されるのを逃れるために、ケンタッキー州に住む別の兄弟のところへヘンソンの妻と二人の子供を含む二十名あまりの奴隷たちを連れて行くようにヘンソンに命じたためである。主人の言いつけに従って出発したヘンソンとその一行は、途中、自由州であるオハイオ州のシンシナティを通りかかった際、そこに住む黒人たちから自由領土に留まり自由の身分を享受するように説得される。しかしヘンソンには「自由のためでさえ犯したくない名誉の感情」があり、主人から任せられた任務を忠実に果たすことを選ぶ。彼は言う、「私は自分の家族、私の仲間、そして私自身を、少しの危険もなく、誰にも不正義を働くことなく解放することができただろう。誰にもというのは、私たちのうち誰一人として愛する理由のない者、長年にわたって私たちに対する残酷と抑圧の咎のある者、そして私たちあるいは私たちのような境遇にいる誰に対しても少しの同情の様子も見せたことのない者を除いて、ということであるが」。つまりヘンソンは主人が彼の感じる義務感に値しない人物であり、仮に自分が他の奴隷を率いて逃亡しても非道な主人に対する「正しいと呼んでもよいかもしれない応報」だと認めてはいたが、それは主人との約束を破る理由にはならないと考える。応報とは結局のところ「私が負わせる罰ではない」のだから (23-24)。

ヘンソンがここで義務や正義といった概念を強調しているのは、彼の逃亡奴隷物語の根底に一貫して流れている神への信仰と忠誠という主題を示唆する。神への信頼を頼りにこの最初の大きな試練をなんとかかくぐりぬけたヘンソンであったが、彼の忠誠心を試すより困難な試練が待ち受けていた。ヘンソンら一行が主人の兄弟エイモス・ライリーの待つケンタッキーの農場にたどり着いて三年ほど経ったある日、ヘンソンは主人アイザックから一通の手紙を受け取る。それはヘンソンに、彼がケンタッキーに引き連れてきた奴隷たちを売って、それで得た利益をアイザックのもとへ持って帰るよう命じる手紙であった。ヘンソンは、自分が他の奴隷たちをケンタッキーに連れてきたがために、長年の仲間である彼らが売られてしまうの見届けなくてはならないことに少なからず良心の呵責を感じながらも、任務を忠実に果たすことにする。メアリーランドへの旅の途中、メソジスト教会のとある白人の説教師の協力によって、彼はさまざまな場所で説教を行い、そのたびに謝礼金を得られたことから、自分の自由を買うという昔から抱いていた希望が彼のなかでにわかに関心味を帯びるようになる。そこで主人アイザックのもとに着くと、ヘンソンは所持金 275 ドルと馬を売って得たお金を合わせた 350 ドルを元手にして、450 ドルで自由を買う約束を主人から取り付ける。不足分の 100 ドルをこの先支払うという条件付きであるが、ヘンソンが念願の解放証書を得たのは 1829 年の三月、あと数ヶ月で四十歳になろうかという時である。しかし、喜び勇んで妻と子供たちがいるケンタッキーに戻ると、彼は耳を疑うような話を聞くことになる。エイモスがアイザックから受け取った手紙によれば、ヘンソンがアイザックに支払わなくてはならない額は 100 ドルでなくて、650 ドルだというのである。ヘンソンには彼の正しさを証明してくれる人がまわりに誰一人いなかったため、この不当な金額を受け入れる他なかったが、エイモスの農場にいる限り 650 ドルを稼ぐというのはほとんど不可能である。アイザックが仕掛けた「卑劣で見たところ取り返しつかない計略」はヘンソンを深い怒りと絶望におとし入れる。彼は言う、「そのような卑劣

な行為に対する私の深い感情を表現するのに、憤慨というのは弱い言葉である」(35)。しかしどうしようもない失意に駆られながらも、ここでも彼は試練をなんとか乗り越える。あらためて「神を信じ、絶対に絶望しないと決意」するのである(37)。

ところがヘンソンの試練はこれで終わりではなかった。ケンタッキーに戻って一年ほど経ったある日、エイモスはヘンソンに、彼の二十一歳の息子エイモス(同名)に付き添って船で川を下り、深南部ルイジアナのニューオリンズで貨物を処分する手伝いをするように命じたのだ。これが何を意味するかはヘンソンにとってあまりに明らかであった。彼は自分の身がニューオリンズで貨物と一緒に売られることを確信する。ニューオリンズはミシシッピ川のはるか下流に位置する町であり、奴隷たちにとってそこに送り込まれることは奴隷制から抜け出せる可能性がほぼゼロになることを意味していた。ニューオリンズへ向かう船のデッキの上を歩きまわりながら、ヘンソンが自分の悲運について考えを巡らせていると、ある暗い考えが彼のなかで頭をもたげてくる。温厚なアンクル・トムのモデルであるはずのヘンソンが、まったく違う相貌をみせる瞬間である。

アイザックとエイモスのために私がしてきたすべてのことの後で、(…)彼らへの私の要求に対する彼らの完全な配慮のなさ、そして自らの利益と思われることのためにいつでも私を犠牲にしようとする際の彼らのひどい身勝手さのこのような証拠を見るにつけ、私の血は怒りと虫けら根性に満たされるほど煮えくりかえり、私を活発で、言うならば感じのよい気性の人物から、野蛮でむっつりして危険な奴隷に変えた。私は屠殺へと羊のようにおとなしく向かっていたわけでは全くなく、日々自分が凶暴になっていくのを感じていた。(…)私は制御できない憤怒でますますかき乱されるようになっていった。(…)私は自分自身に言った。「(…)私に感謝を示してくれる友人であるはずの私の主人と所有者たちによって、私の命が縮まるに違いないだけでなく、より惨めになることも違いない場所と環境へと私は連れて行かれようとしている。もしこの悪行を防ぐことができるならば、彼らの命を縮めることで、あるいはこのような忌むべき不正義をなすための彼らの手先の命を縮めることで、どうして防いではならないのであろうか？(…)私が彼らを始末して逃げる方法はたくさんあるし、そのための最初のよい機会に乗じたとしても許されるはずだと感じる。」こうしたことはただ単に私の心の目をかすめて消えてしまう考えではなかった。こうしたことは、あらわれるたびにますます大きくなり、ますますしっかりとしたようにみえる形をとっていった。そしてついに、この幻の影を確固たる現実に変えることに私の心は定まった。四人の同伴者を殺し、ボートにあるだけの金をとり、船を沈めて、北部に逃げようと私は決心した。(40-42)

ミシシッピ川を下る船上でのヘンソンのこの決意は、ダグラスがコヴィに完全に屈服させられた後にチェサピーク湾に浮かぶ無数の船に向けて発した嘆きのことばを想起させる。ダグラスは、湾を自由に滑走する船たちに比べて自分の奴隷としての惨めな境遇を嘆きつつも、まさに独白することを通して、悲嘆を逃亡への新たな決意に変えていた(*Narrative* 59)。両奴隷がたどったこの決意への過程は、どん底の状態にありながら考えを心のなかで反芻することを通して行動への意思を固

めるといふ点で比類しうると言つていいだらう。しかし決定的に違ふのは、ヘンソンの決意は、奴隷制から逃れる決意というよりも、彼の自由を奪おうとする者を殺す決意であるといふ点である。ダグラスの独白において主役を演じていたのが自由への意思だとしたら、ヘンソンの独白で他を押しつけて主役の座に躍り出てくるのは抑えのきかない怒りと殺意である。¹⁴

しかしこの殺害への決意はヘンソンにとって最終的な決断ではないことが後に判明する。彼にとって真の決意が訪れるのは、ニューオリンズまであと数日のある晩、彼が船内で眠るエイモスに忍び寄り、斧を手にとって計画を決行しようとした時である。ヘンソンはそれまで、殺害は「自己防衛だ——他の人が私を殺すのを防ぐためだ——それは正当化される、称賛にさえ値する」と考えていた。しかし斧を振り下ろそうとした瞬間、「なんと、殺人を犯すといふのか！おまえはキリスト教徒なのに？」といふ声がどこからともなく聞こえ、ヘンソンは踏みとどまる。彼は「それまでそれを殺人と呼んだことはなかつた」が、この時、自分がしようとしていることが「犯罪であるといふ真実」がはっきりと「耳にささやかれるのが聞こえた」ので、「聴くために振り向いた」ほどであつた。これをきっかけに、ヘンソンは自分の意思を劇的に反転させる。彼は殺害計画を深く恥じ、「神の意志に身を委ね、可能であれば感謝をもって、しかしどんな場合でも恭順さをもって、神がどんなものを私の命運と決めようともそれを受け入れる莊嚴な決意」を固める（42-43）。かくして主人殺害といふ「幻の影を確固たる現実に変える」ヘンソンの決意は、それ自体が怒りと絶望によつて生み出された「幻の影」、つまり一過性の過ちであつたことが判明し、それにかわつて敬虔なキリスト教徒として運命をただひたすら受け入れることこそが、彼が揺らぐことのない意志をもつて「確固たる現実」に変えるべき正しい選択であることが明らかにされる。

ストウがヘンソンをアンクル・トムのモデルだといふ時、彼女が念頭に置いているのは、主人の殺害を決意したヘンソンではなく、殺害計画から劇的に身を翻して神の意志を受け入れることを覚悟したヘンソンであることは明らかである。しかし彼女が『アンクル・トムの小屋への鍵』で後者の場面のみにスポットライトを当てていることは（Stowe, Key 26-27）、ヘンソンの同じくらい雄弁で強く訴えかけてやまない別の顔から語る声を奪うことになつていないだらうか。ヘンソンはストウが示唆するようにアンクル・トムと近親性を有するだけでなく、実はストウの小説のなかでトムとは対極に位置する反抗的な奴隷ジョージ・ハリスとも連続性を有していないだらうか。¹⁵

宗教者としてのヘンソンの物語に埋め込まれた反抗的な奴隷としてのヘンソンの横顔を考える上で注目に値するのは、この物語の冒頭に置かれたある痛切なイメージである。それはヘンソンの幼少期の最初の記憶として提示されている父親の凄惨な姿である。ある日、ヘンソンの父親は、ひどくむち打たれ、右耳を切り取られ血まみれになつて帰宅してくる。ちょうど十数年後のヘンソンが奴隷監督のリットンから「白人を殴ることはどういふことなのか学ばせる」といふ名目で瀕死の重傷を負わされたように、ヘンソンの父も白人を殴つたためにメアリーランド州法に則つて処罰されたのだ（17, 1）。この出来事をきっかけに父親は「人好きのする気性の人物」から「違つた人物」へと、「陰鬱で反抗的で扱にくい」奴隷へと変貌を遂げてしまふ（2）。父親の劇的な変化、そし

てそれに続く深南部アラバマへの売却は、ニューオリンズに向かう船の上で「野蛮でむっつりとして危険な奴隷」になりつつあったヘンソン自身の運命を予兆するものであり、ヘンソンの改宗物語の根底に鳴り響く不気味な副旋律となっている。

そしてこの副旋律はいつでもヘンソンの生涯の物語を支配する基調音となる可能性があった。彼がニューオリンズで売られるのをかろうじて逃れることができたのは、貨物が売られて翌日にはヘンソンも処分されるという寸前で、同伴する主人の息子エイモスがたまたま病気になったからである。この出来事によって「局面は一転」する(45)。それまでヘンソンの生死は主人の思惑次第だったのが、今度は主人の生死がヘンソンの行動いかんにかかってくるようになったのである。遠く離れた深南部の見知らぬ地で見放さないでほしいという主人の懇願を聞き入れて、ヘンソンはミシシッピ川をさかのぼる蒸気船にエイモスを乗せ、つきっきりで看護をする。瀕死のエイモスを無事生まれ故郷へと送り届けたことで主人たちからはたいへんな賞賛を受けたヘンソンであったが、「私の美点は、それがどんなものであろうと、同情あるいは私への何らかの愛情を呼び起こすかわりに、彼らにとっては私の市場価値を増すだけ」ということを再認識して、ついに逃亡を決意する。自分が今回助かったのは、「神意」(Providence)によるのかもしれないが、「私はこのような稀な状況が繰り返されると期待することはできなかった」(47)。ここでもヘンソンの神への信仰はまだ続いているが、神はもはやただ身を委ねていればよいだけの存在ではなく、彼を試すために言わばさいころを振る神としてあらわれる。もしその目が悪ければ、ヘンソンは父親と同じように深南部で酷使され人知れず短く無惨な一生を終えることになる可能性、言い換えれば、彼の生涯の語られることのない物語は「野蛮でむっつりとして危険な奴隷」のそれとなっていたかもしれない可能性と直面して、ヘンソンは逃亡を決意するのである。

ここで注目に値するのは、ヘンソンが自身の決意を正当化するために根拠としたのは、どうやっても量り知ることのできない神の意志ではなく、現にこの世にある彼の生命とそれに本来そなわっている自然の権利だったということである。彼は続けてこう述べている。

私の生命に対してだけでなく、私の身に備わる生得の権利 (natural rights)、そして私が自分自身を買うために払ったお金によって奴隷制の野蛮な法のもとにありながら獲得した権利に対して、アイザックとエイモスが企てる邪悪な謀略から、私自身と家族を守るために私ができることはすべてしなければならなかった。もしアイザックが彼自身の契約を守るくらい正直でさえあったならば、私は私の契約を守り、私が約束した全額を彼に支払っていただろう。しかし、私の市場価値の四分の三を盗み取った後に私の身を再び取奪しようという彼の試みは、私が彼にこれ以上支払う義務、あるいは彼の策略にさらされる地位に居続けないといけないというすべての義務から私を放免したと私は考える。(47)

もちろんこの主張の前提となっているのは、例えばアメリカ独立宣言の冒頭に明快に表現されているように、¹⁶ いわゆる「自然権」は神によって与えられているという考えである。しかし同時に、こうした自然権は、神の存在をとりあえず棚上げにしてあくまで現世的な価値として擁護すること

ができることも確かであり、実際にここでのヘンソンの主張はもはや神に依拠していない。この点で、逃亡を企てるヘンソンは、あの世での救済を求めたアンクル・トムよりも、この世で自由を獲得することに心を定めたダグラスに限りなく接近する。そしてこの世俗的な横顔は、彼の宗教家としての表の顔にもかわらず、¹⁷ カナダに逃亡することに成功して以降も、仲間のアフリカ系住民たちが「自分自身の労働のすべての利益を確保」し、「自分自身の主人になる」ように奮闘する彼の姿のなかに継続して認められる（67, 68）。後年のヘンソンは熱心な宗教家であるとともに、現世的な「権利」の擁護者でもあった。

したがって、現実の逃亡奴隷ヘンソンは、アンクル・トムというただひたすら従順で信仰心篤い母型的奴隷像に決して集約されることのない多元的な輪郭をもった人物であったと結論づけるべきであろう。ただしここで断っておかなくてはならないのは、一元的な人物像への還元はストウだけに責任があるのではなく、その遠因は自己の人生を公に向けて提示するための物語的な枠組みとして宗教者としての物語を選択したヘンソン自身にもあるということである。これはさらにつきつめて言えば、ヘンソンに（そして彼の物語を書き取り出版した白人の協力者に）¹⁸ そうした選択をするように方向付けした社会的な圧力にも注目しなければならないということである。一元的な人物像への還元にとまなう問題は、ある特定の選別を必然化するこうした社会的な諸力を見えにくくしてしまうことにある。この意味で、ヘンソン自身が改宗物語のなかに封印しなければならなかった別の物語を、他のアフリカ系アメリカ人のテキスト群との連続性のなかで復活させることは重要である。この抑圧された物語は、抑圧を要請する社会的擬制の必然性と、まさにそこに隠匿されねばならなかった別のありえたかもしれない可能性を教えてくれるのだから。

¹ 本論文は、もともとは拙論「十九世紀中葉における「抵抗する奴隷」の表象——フレデリック・ダグラスとハリエット・ピーチャー・ストウの間テキスト的対話」の一部として書かれたが、スペースの都合で割愛しなければならなかった議論に大幅に加筆したものである。本稿で議論する間テキスト的な関係性を取り巻くより大きな歴史的コンテクストについてはそちらの論文を参照されたい。

² この表現の有力な流通源のひとつとして考えられるのは、イギリス人編集者ジョン・ロップ (John Lobb) である。週刊誌『クリスチャン・エラ』の編集長であったロップは、1876年以來、『ジョサイア・ヘンソンの生涯』をいくつもの版にわたって出版しているが、1881年版に寄せた「編集注記」において、『アンクル・トムの小屋』の発行部数は「聖書以外のどんな本によっても上回られていない」と述べている (Lobb 11)。『アンクル・トム』の人気に便乗して『ヘンソンの生涯』を売り込もうとしているロップの言葉はある程度差し引いて受け止める必要があるとしても、『アンクル・トム』の発行部数は当時としては記録破りであったことは確かである。出版後のわずか一年間で、アメリカで30万部というのが広く受け入れられている数字であるが、ほぼ同じ期間にイギリスで100万部売れ、著作権の及ばない翻訳版等まで含めると世界中で250万部売れたという推計もある (Hedrick 223; Sundquist 18; Gossett 239; Wilson 3)。いずれにせよ、ジェーン・トンプキンズが述べるように、『アンクル・トム』は「100万部以上売れた最初のアメリカ小説」であり、「その世紀で最も重要な本」と考えて問題はないだろう (Tompkins 124)。ロップについては、Winks, “Josiah Henson and Uncle Tom” xxiii-xxv を参照のこと。

³ ヘンソンの自伝の出版史については、Winks, “Josiah Henson and Uncle Tom” xxxi-xxxiii が詳しい (ただし、1876年版の出版年がなぜか1877年と記載されている)。ヘンソンの自伝のいくつかの版を参照するための有用な

アーカイヴとしては、ノースカロライナ大学チャペルヒル校が運営しているウェブサイト *Documenting the American South* があり、そこでは2013年5月現在、以下の代表的な四つの版が公開されている。

- ① *The Life of Josiah Henson, Formerly a Slave, Now an Inhabitant of Canada, as Narrated by Himself*. (Boston: Arthur D. Phelps, 1849)
- ② *Truth Stranger Than Fiction. Father Henson's Story of His Own Life*. (Boston: John P. Jewett, 1858)
- ③ *Uncle Tom's Story of His Life. An Autobiography of the Rev. Josiah Henson (Mrs. Harriet Beecher Stowe's "Uncle Tom")*. From 1789 to 1876. With a Preface by Mrs. Harriet Beecher Stowe, and an Introductory Note by George Sturge, and S. Morley, Esq., M. P. (London: Christian Age Office, 1876)
- ④ *An Autobiography of the Rev. Josiah Henson ("Uncle Tom")*. From 1789 to 1881. With a Preface by Mrs. Harriet Beecher Stowe, and Introductory Notes by George Sturge, S. Morley, Esq., M. P., Wendell Phillips, and John G. Whittier. Edited by John Lobb, F.R.G.S. Revised and Enlarged. (London, Ontario: Schuyler, Smith, & Co., 1881)

これらの版のなかで一番大きな飛躍が認められるのが第一から第二自伝の間で、後者では前者の簡素な記述に大幅な加筆がなされている。例えば、①の最初では幼少期の父親の記憶として、父親が血まみれになって帰ってきたことと南部アラバマへ売られてしまったことが一つのパラグラフで簡潔に述べられているのに対して、②では同じ一連の出来事がひとつの独立した章として、六つのパラグラフにわたって物語られている。②から③、そして③から④への加筆は、主に新しい出来事についての章を継ぎ足したもので、①から②への変化ほど質的に大きなものではない。(ただし、③ではじめて付け加えられたストウ婦人との面会についての章は例外である。これについては注5を参照のこと。) 本稿は『アンクル・トム』出版以前の時代を焦点とすることから、主に第一自伝を参照する。

⁴ 白髪の好々爺というアンクル・トムのイメージ自体、必ずしも『アンクル・トムの小屋』のなかの記述に忠実に基づくものではなく、むしろこの小説の受容の過程で定着したものである。これに関しては、Yarborough 63を参照。白髪の好々爺というアンクル・トムのイメージの実例としては、Gates, ed., *Annotated Uncle Tom* の304頁と305頁の間のページに収録されているいくつかの図版を参照のこと。

⁵ ヘンソンがアンクル・トムのモデルであるというストウの主張を検証する上で考慮すべき点が二つある。第一に、ストウが『ヘンソンの生涯』を(部分的にでも)最初に読んだのはいつか。第二に、『アンクル・トムの小屋』執筆以前にストウとヘンソンが面会したというそれぞれの主張は本当なのか。第二の点についてはロビン・ウインクスが詳しく議論しているように、両者の主張は『アンクル・トム』が出版されてから二十年以上経ってからのなされたもので、あまり信憑性がない(Winks, "Josiah Henson and Uncle Tom" xix-xx)。マリオン・スターリングは両者が会ったのは『アンクル・トム』出版後の両者のイギリス滞在中だと述べているが、ストウがイギリスを訪問したのは1853年の四月十日から六月四日までであるのに対して、ヘンソンの記述によれば彼が二回目のイギリス訪問をしたのは1851年後半から1852年の九月にかけてであり、彼が次にイギリスを訪問するのもその二十五年後であって、いずれも時期は重なっていない。(Starling 239; Hedrick 233, 250; Henson, *Autobiography* 99, 107, 147)。第一の点については、1849年に『ヘンソンの生涯』が出版された直後に出たある記事を通して、ストウがヘンソンの抜粋を読んだ可能性がスターリングによって指摘されている(Starling 238-39)。エフレイム・ピーボディ(Ephraim Peabody)という名の牧師によって書かれ、「逃亡奴隷たちの物語」と題されたこの記事は、ヘンソンとダグラスを含む五つの逃亡奴隷物語を論じているが、そのなかでも彼は特にヘンソンを評価し、後半の約十五ページを割いて長々と引用しつつ紹介している。ストウが『鍵』で引用しているヘンソンからの抜粋は、ピーボディの記事にすべて含まれている。この記事が掲載された『クリスチャン・エグザミネー』誌をストウ家が購読していたというスターリングの主張(xviii)には確たる裏付けがないが、ストウがアメリカでも指導的な立場の牧師の家系にいることを考えれば十分にありえることのように思える。ただしその場合でも、ストウがアンクル・トムを造形する上でピーボディが提示するヘンソンにどれだけ依拠しているのかは議論の余地がある。

⁶ 加えて、逃亡後もあくまでアメリカにとどまることにこだわったダグラスよりも、米国の外に移住しカナダでアフリカ系住民のための共同体を作ったヘンソンのほうが、ストウの主張するアフリカ系住民のリベリア植民の方針と一致した。

⁷ このブームについては、Starling 1-2, 106を参照。

- ⁸ 1845年の『生涯の物語』では、ダグラスはこの出来事が起こったのが1832年だと記しているが、これは間違いである。1855年の第二自伝『私の隷属と私の自由』(*My Bondage and My Freedom*)以降の記述では、ダグラスは青年期のある時期までの出来事について、すべて一年後ろにずらした年に修正している(つまりここでは1833年)。
- ⁹ このモチーフがマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1920年)でのよく知られる主張とどの程度まで重なりあうのかは検討に値する。これは、南部奴隷制が近代資本主義の発展のなかにどのように位置づけられるべきかという問題に関連するだろう。
- ¹⁰ ダグラスが自身の宗教意識の目覚めをひとつの主題としてはっきり提示するのは、『私の隷属』からである。この第二自伝で「宗教的な性質の目覚め」と題された章を導入しているが、そこにおいてさえ、宗教意識の覚醒は「奴隷制廃止論者」(abolitionists)という言葉が偶然聞いてその意味を探し求めるというエピソードと文字を書く訓練の間に注意深く挟まれている(*My Bondage* 229-35)。
- ¹¹ この点に関しては注18を参照。
- ¹² 1849年の第一自伝ではこの人物の名前は述べられないが、1858年の第二自伝からは名前が明らかにされている(例えば、Henson, *Autobiography* 23を参照)。同様に、第一自伝では奴隷所有者のファミリーネームが頭文字以外伏せられているが、それ以降の版では明示されている。
- ¹³ ここで括弧に入れたのは、奴隷同士の結婚は法的に認められていなかったからである。とはいえ、奴隷所有者は子供が生まれることによる財産の増加、そして結婚して子供を持った奴隷は単身の奴隷よりも逃亡する危険性が少ないという理由から事実上の結婚を奨励した。また、結婚は奴隷自身にとっても、頼りにできるものが他にあまりない環境のなかで精神的にも実質的にも支えとなっていた。この点に関しては、Blasingame 151-52を参照。
- ¹⁴ この点でヘンソンの独白はロマン派的な悪魔的英雄を思わせるところがある。例えば、メルヴィルが『白鯨』(1851年)においてエイハブ船長という悪魔的人物を造形したのもほぼ同時代である。ヘンソンと同じように、エイハブは船の甲板を往復しながら自分の足を奪った敵に復讐を誓う。彼の独白はこうである。「私が意思したことを、私はやってみせる! (…) 私の定まった目的への道には鉄のレールが敷かれていて、私の魂はその上を走るよう溝が彫られているのだ」(Melville 183)。もちろんこれはメルヴィルがヘンソンを読んでいたと言っているわけではなく、違った領域で仕事をしていた二人に共通した影響が認められると述べているにすぎない。
- ¹⁵ この点に関しては拙論「十九世紀中葉における「抵抗する奴隷」の表象」も参照。『鍵』においてストウはジョージ・ハリスの記述の元になっているいくつかの記述のひとつとしてヘンソンを挙げているが、それは母親と子供が奴隷市場でばらばらに売られるという、確かに悲痛ではあるが逃亡奴隷物語では定型的とも言ってもよい描写である(Stowe, *Key* 19)。
- ¹⁶ 独立宣言ではこのように謳われている。「すべての人はその創造者によってある譲り渡せない諸権利を与えられており、そのなかには生命、自由、幸福の追求がある。」
- ¹⁷ 正確には「彼の宗教家としての顔ゆえに」というべきであり、ヘンソンの言う「ヤンキー精神」(67)はまさに宗教と実業を融合させたものであると考えられるが、本稿でこの問題について詳細な議論をすることはできない。宗教と実業との関係については注9も参照。
- ¹⁸ 1849年にヘンソンから話を聞いて書き取ったのは、1837年から39年までボストン市長を勤めたサミュエル・アトキンス・エリオット(Samuel Atkins Eliot, 1798-1862)である。穏健な反奴隷制的立場で知られるエリオットがヘンソンの物語の基調を決定する上でどのくらいの役割を果たしたのかについては議論の余地があるが、ウインクスが指摘しているように、「文体、ペース、全体の比率において、[第一自伝は]ヘンソンの生涯の飾りのない単純さを反映している」とみるべきであろう(Winks xiii)。他方で、ピーボディが述べるように、それはエリオットがヘンソンの口述をそのまま書き写したのではなく、「口述にあわせて書いた」ものである以上、エリオットの視点が物語を強く方向付けている可能性も否定できない(Peabody 78)。

Works Cited

- Blassingame, John W. *The Slave Community: Plantation Life in the Antebellum South*. Revised ed. New York: Oxford UP, 1972.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, An American Slave. Written by Himself*. 1845. Gates, *Frederick Douglass* 1-102.
- Gates, Henry Louis, Jr., ed. *The Annotated Uncle Tom's Cabin*. New York: Norton, 2007.
- , ed. *Frederick Douglass: Autobiographies*. New York: Lib. of Amer., 1994.
- . *Figures in Black: Words, Signs, and the "Racial Self."* New York: Oxford UP, 1989.
- Gossett, Thomas F. *Uncle Tom's Cabin and American Culture*. Dallas: Southern Methodist UP, 1985.
- Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.
- Henson, Josiah. *Autobiography of Josiah Henson: An Inspiration for Harriet Beecher Stowe's Uncle Tom*. Mineola: Dover, 2003.
- . *The Life of Josiah Henson, Formerly a Slave, Now an Inhabitant of Canada, Narrated by Himself*. Boston, 1849.
- . *Documenting the American South*. Web. 31 May 2013.
- Lobb, John. "Editorial Note." Henson, *Autobiography* 8-11.
- Melville, Herman. *Moby-Dick*. New York: Penguin, 1992.
- Nichols, Charles H. "The Origins of Uncle Tom's Cabin." *Phylon Quarterly* 19 (1958): 328-34.
- . "Who Read the Slave Narratives?" *Phylon Quarterly* 20.2 (1959): 149-62.
- Olney, James. "'I Was Born': Slave Narratives, Their Status as Autobiography and as Literature." *The Slave's Narrative*. Eds. Charles T. Davis and Henry Louis Gates, Jr. Oxford: Oxford UP, 1985. 147-75.
- Peabody, Ephraim. "Narratives of Fugitive Slaves." *Christian Examiner* 47 (1849): 61-93.
- Starling, Marion Wilson. *The Slave Narrative: Its Place in American History*. 2nd ed. Washington D.C.: Howard UP, 1988.
- Stowe, Harriet Beecher. *A Key to Uncle Tom's Cabin*. 1853. Seattle: Inkling, 2005.
- . *Uncle Tom's Cabin*. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. 2nd ed. New York: Norton, 2010.
- Sundquist, Eric J. Introduction. Sundquist, *New Essays* 1-44.
- , ed. *New Essays on Uncle Tom's Cabin*. Cambridge: Cambridge UP, 1986.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985.
- Wilson, Edmund. *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War*. 1962. New York: Norton, 1994.
- Winks, Robin W. "Josiah Henson and Uncle Tom." Introduction. Henson, *Autobiography* v-xxxiv.
- . "The Making of a Fugitive Slave Narrative: Josiah Henson and Uncle Tom—A Case Study." *The Slave's Narrative*. Ed. Charles T. Davis and Henry Louis Gates, Jr. Oxford: Oxford UP, 1985. 112-46.
- Yarborough, Richard. "Strategies of Black Characterization in *Uncle Tom's Cabin* and the Early Afro-American Novel." Sundquist, *New Essays* 45-84.
- 堀 智弘「十九世紀中葉における「抵抗する奴隷」の表象——フレデリック・ダグラスとハリエット・ピーチャー・ストウの間テキスト的対話」、権田建二・下河辺美知子編著『アメリカン・ヴァイオレンス—見える暴力・見えない暴力』、彩流社、2013年。175-200頁。